

一瓦と寺の密接な関係一

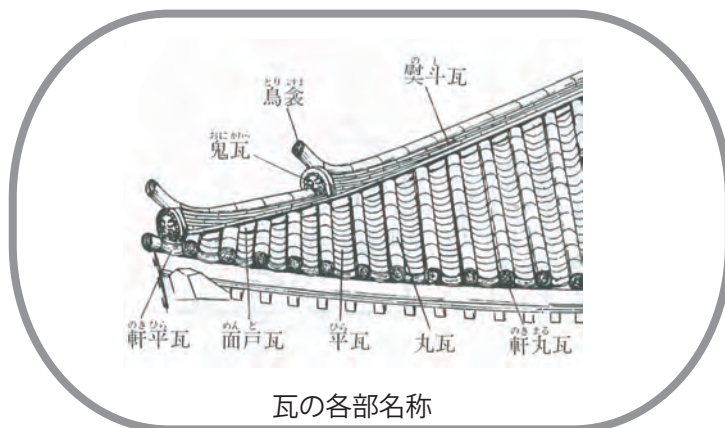
今日では、瓦を葺いた建物はどこにでもあります。安養寺が開山された約 700 年前の鎌倉時代には、瓦葺きの建物はほとんどなかったと考えられます。その当時、周辺で最も栄えていたのは齋宮寮ですが、齋宮寮では仏教を忌避していたため、瓦葺きの建物はありませんでした。ちなみに、齋宮寮で使われていた忌詞(いみことば)(使ってはいけない言葉)には「寺院」があり、「瓦葺き」と言い換えることとされています。当時の人達にとって、瓦を葺いている建物は寺だけであるという感覚があったようです。

一瓦の種類と数一

当時使われていた瓦には様々な種類があり、安養寺にも多種多様な瓦が葺かれていたことが出土した瓦からわかります。基本的なセットには平瓦と丸瓦があり、建物の端につけるものは軒瓦と呼ばれています。

軒瓦には文様がつけられており、軒丸瓦には巴文、軒平瓦には唐草文が多く、剣頭文や連珠文がつけられたものもあります。巴文は鎌倉時代から付けられるようになった文様で、魔除けの効果があるともいわれています。

ほかには、仏堂屋根の大棟部分などに設置する鬼瓦があり、建物を災厄から守るために怖い顔をした鬼が表現されています。安養寺跡からは完全な形のものは見つかりませんが、鬼の目が線刻されたものが出土しています。



瓦の各部名称

ともえもんのきまるがわら
巴文軒丸瓦からくさもんのきまるがわら
唐草文軒平瓦

鬼瓦

(顔の右部分、中央の丸は目)

ただ、百間四方の大伽藍であった安養寺にしては出土する瓦の量が少なく、安養寺跡を解明する上で大きな謎となっています。現在のところ、安養寺跡から出土する瓦の量が少ない理由として考えられるのは、以下の3点です。

- ①安養寺が現在の場所に再建される際(1588年)に、古い瓦を再利用した。
- ②安養寺が焼失したと伝えられる際(1576年)に、残った瓦は他の場所に運ばれ、再利用された。
- ③そもそも仏堂に瓦を使っている建物が少なく、ごく一部の仏堂で瓦が葺かれていた。
- ④安養寺の仏堂では、瓦は目立つ部分にしか葺いておらず、残りは板葺きなどであった。

今となっては、当時の伽藍や建物が残っておらず、解明にはまだ時間がかかりそうです。

かわらがま 一瓦窯の発見一

しかし、徐々にではありますが発掘調査によって解明されている部分もあります。2014年度に行った発掘調査では、約500年前の室町時代の瓦窯が見つかっており、寺院境内で瓦を焼いていたことがわかりました。見つかった窯は、地面を掘り込んで造る特殊な構造をしており、ロストル式瓦窯と呼ばれているタイプです。写真奥部分に畝のようなもの(ロストル)が見えますが、ここが瓦を焼く焼成室になっており、ロストルの間に瓦を入れて焼く構造になっています。

以上のように現在建物などが残っていなくとも、屋根の一部だった瓦を調べることで、屋根構造や仏堂・寺院内の様子などを明らかになっていくことが期待されます。



調査で見つかった瓦窯



文字を刻んだ瓦

瓦に文字を刻むことは、現在でも寺院の奉納瓦に見られますが、当時は瓦大工の棟梁などが代表して、棟梁の名前や出身地、瓦を作った年月日などを刻む例が確認されています。安養寺跡からは2例出土しており、ひとつは棟梁の名前と考えられるもので、「橘 吉重」と刻まれています。この人は奈良や京都などでも活躍した瓦大工として有名で、法隆寺や東福寺の修繕にも関わっていました。同一人物かどうかは不明ですが、貴重な資料です。もうひとつは、瓦を作った年と考えられる「大永二年」(1522年)が刻まれたものです。ただ、これらの瓦も通常の瓦と同様、屋根に葺かれたと考えられるため、普段目に見えそうなものではなかったと思われます。それでも、安養寺という大寺院に、なにかの記念を残したかったのでしょうか。



「大永二年」刻書平瓦